

1870-80年代のイタリア実証主義とその周辺のスピ ノザ

著者	近藤 和敬
雑誌名	鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集
巻	86
ページ	49-56
発行年	2019-03-13
別言語のタイトル	Le positivisme italienne vers les annees 1870-80 et le spinozisme dans ce domaine
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030445

一八七〇―一八〇年代のイタリア実証主義と

その周辺のスピノザ

近 藤 和 敬

序

本稿では、イタリア実証主義およびその周辺の関連思想におけるスピノザの〈遍在〉について、概略を描く。その目的は以下である。

1. これまでの拙論 (F. Worms のスピノザ論および V. Delbos のスピノザ論・いずれも本号所収) で問題になったフランス実証主義社会学のグループ内でのスピノザのプレゼンスを理解する手段として、相互に影響があったとみられるイタリア実証主義の側から、しかもそれよりも一〇年から二〇年ほど前の時代に戻ってより理解を深めること。

2. 実証主義とスピノザの関係について、その一般的特徴とその震源について推測すること。

3. フランスに限定されないより広い範囲での思想の力線を明らかにすることで、スピノザが互いに異なる文脈のなかで分散しつつも遍在することの理由を推測すること。

本稿で実際にやることは、主に『一九世紀のスピノザ』に所収されているイタリアにおけるスピノザのなかの三つ論文 (Savarelli 2007,

Bordoli 2007, Braustein 2007) に基づいて、その全体を並べなおしつつ、それらの論文では注で触れられているだけのいくつかの情報 (Fouillee 1890, Espinas 1880) を加えて、整理することである。

本稿では主に一九世紀後半のイタリア哲学の状況を扱うが、Eugenio Garin, *History of Italian Philosophy*, Brill Rodopi, 2007 に「*かれは、少なくともここで言及するものなかで最も古いスパヴェンタ Spaventa の言及よりも、ずっと以前に Paolo Mattia Doria, 1667-1746 によって、デカルトからの、少なくともフデイカルなデカルトからの必然的な発展としてのスピノザと、どうものが論じられている (Garin 2007: 657)。*

またイタリア哲学史においてスピノザがある意味で重要な人物として取り上げられる理由の一つは (あとでスパヴェンタのところでも若干触れるが)、イタリア哲学の一つの重要な起源にジオルダーノ・ブルーノ 1548-1600 が置かれることがおおく、そしてブルーノの哲学とスピノザの哲学が重ねて論じられる (この図式はヘーゲルの『哲学史』に由来することが指摘されている) ことが多いことによる。もう一つの理由は、イタリア統一運動 (あるいはむしろ独立戦争) とライシテとの関係から、合理主義が強く求められる背景があったということである。ただこの背景自体は、実際のところ、フランスの第三共和政期のもと類似するところがあり、どちらが先なのか、ということについては明瞭ではない (歴史的な時間的にはイタリアが先にみえるが、言及関係を見るとフランスが先にみえる)。むしろどちらが先ではなく、イギリスの実証主義 (ミル、

1 ヘーゲル (長谷川宏訳『哲学史講義』(下巻)「B、哲学独自のところのみ
三、ブルーノ」、一二五頁。「だから、かれ(ブルーノ)の哲学は、一般的に、*いって、スピノザ主義ないし汎神論です。*」

スペンサー)との関係のなかで一体として動いていたとみるほうが現実的かもしれない²。

² 本稿で登場する人物の背景について簡単に提示しておく。

ベルトラント・スパヴェンタ *Bertrando Spaventa*, 1817-1883。イタリアヘーゲル派。スピノザとブルーノの関係について、ヘーゲルの影響を受けて研究を始めたが、後にヘーゲルの影響を乗り越えて、ブルーノ以上にスピノザの自然主義的な傾向を評価した。弟子には、親戚でもあるクロッチェや、ファシズムへと傾倒したジェンティーレらイタリアヘーゲル派がいる。

ロベルト・アルディーリ *Roberto Ardigò* 1828-1920。イタリアにスペンサーとコントから影響を受けた実証主義哲学を導入した第一人者でありながらも、前半生ではカトリックの司祭を務め、神学をパドヴァ大学で教えた。イタリアで優位であったドイツ観念論を批判し、感覚から知識が生じるとした感覚論を展開した。一八七〇年代から1900年頃まで、イタリアで支配的な思潮を形成した。著作は、一八七〇年に『実証科学としての心理学』、1879年に『実証主義者の道徳』などがある。

チェーザレ・ロンブローゾ *Cesare Lombroso*, 1835-1909。犯罪学あるいは犯罪人類学の創始者。イタリア犯罪社会学派を形成し犯罪の遺伝要因説を展開。フランスの環境派(タルドなど)と激しく対立し、後に衰退。医者として出発しつつも、独学に近い形で文学、社会学を学び、自説を『犯罪人間』(一八七六年)で発表し、多くの影響を与えた。

エンリコ・フェリ *Enrico Ferri*, 1856-1929。ボローニャ大学刑法教授、Lombrosoの弟子。イタリアの犯罪学実証主義学者の創始者の一人。犯罪人類学。アルディーゴとの論争が有名だが、初期にはアルディーゴの弟子でもあった。アルディーゴの下を離れたあとロンブローゾの弟子となった。後にイタリア社会党の政治家。『犯罪社会学』(1881)で著名。また第二インターの著名な理論家でもある。

アルフレッド・エスピナス *Alfred Espinas*, 1844-1922。『動物社会』(一八七七年刊) および『技術の起源』(一八九七年刊)で著名な、初期実

アルディーゴの実証主義とスピノザ

ロベルト・アルディーゴは、イタリアにおいて実証主義を根付かせた功績をもつが、その最初の実証主義の著作は、一八七〇年の『実証科学としての心理学』である。初期においてはとくにジョン・スチュアート・ミルおよびハーバード・スペンサーから影響を受けている(むしろコントやテーヌの影響、あるいはむしろ言及は少ない)。エスピナスは、その著書『イタリアの実験哲学…起源と現在』(一八八〇年刊)のなかで³、アルディーゴの実証主義について論じる中で、彼のスピノザと

証主義社会学の一人。ウォルムスともデュルケーム、T・リボー、P・ジャネらとも良好な関係をもっていた。

アルフレッド・フーイエ *Alfred Fouillée*, 1838-1912。一八七二-七五年高等師範学校の助教授として講義(中江兆民が受講している)。その後健康上の理由により退職。実証主義と観念論を調停する思弁的折衷主義を唱えた。また『義務も制裁もない道徳』で知られるギュイヨアの義理の父にあたる。「フォルス・イデー」の哲学を構築したことで著名。『自由と決定論』(初版は博士副論文として一八七二年に、第二版が一八八四年に出版される。以下で参照するのは第二版の一八九〇年版)でスピノザについて論じている。この著書からフェリがスピノザについて多大なインスピレーションを得ている。中江兆民が彼の『哲学史』(邦題:理学治革命)(一八七五年刊)を翻訳(一八八六年)したことも知られる。

³ この著作においてはこの時期のイタリア実験哲学をけん引する人物として、アルディーゴとともにフェリとロンブローゾの名を挙げている(もう一人、Heizsonの名が挙げられているが未詳)。フェリについての言及も少

の関係について以下のように論じている。

「肝心なのは、もっぱら帰納法によつて、これら二つのカテゴリー「物的なものと心的なもの」のあいだの新しい類似を説明するものとして、ある上位のカテゴリーを構想することであつて、このカテゴリーは、これら二つの種類の現象が経験にたいして自らを示す限りにおいて、それらの共通の特性以外なものにも含むことはないだろう。かくして人間は、二つの異なる実体ではなく、二重の側面をもつ現象を集めたもの唯一のものから形成されるものとして現れる。この構想はスピノザのそれであるのだが、アルディーゴ氏によるとスピノザのそれと大きくことなるところは、スピノザの実体が、学知の出発点としてアプリアリなものと考えられているのに対して、前者のものは単に、物質と精神を統合する寄せ集めを含蓄するのみであり、その進展とともに修正されるべく常に準備されている。」(Espinasi 1880: 109.)

「感覚sensationは、あらゆる心的現象の一般名称であつて、それ自身で刺激である。したがつて、思惟の法則とそれとの関係において行為の法則を規定する仕事は、観察にのみ属することになる。すなわち、存在するものが含むのはただ存在すべきものの秘密のみである。

なくないが、とくにロンプローズについては、アメリカへの影響なども含めて後半で多く議論している。ただしスピノザについて論じているところはすべてアルディーゴについての記述の部分のみである。

この方法によつて、アルディーゴ氏は、ストア派の学説とスピノザの学説と呼ばれる学説に導かれる。存在は、常に、その实在条件によつて不可欠なものにとどまる傾向性をもつ。動物、すなわち運動能力をもつ存在は、諸対象を区別し、快と不快を感じるのでなければならぬ。動物はそれぞれの機能が与えられている。どの動物系統においても、欲求desiresとの、また環境の要請との相関関係にある。」(Espinasi 1880: 150-151.)

「アルディーゴ氏は、実際、ストア派およびスピノザが認めていた意味で自由を認めている。すなわち自由とは、生理的衝動impulsionにたいする観念の統治régieである。あらゆる動物学的な系統において、意志の自律は増大しつつあり、人間に近づくにつれ、動物はますます表象にしたがつて自ら決定し、表象はますます包摂的になるという意味においてそうなのである。」(Espinasi 1880: 153)

以上からわかるように、アルディーゴの実証主義哲学にとつて、問題なのは、現在でいうところの心身問題であり、二元論を排して、一元論（これが何の二元論なのかという問題こそが問われなければならないが、アルディーゴのそれは非常に単純な、いわば感覚二元論のように見える）を構想するところにスピノザを要請し、同時に、自由を観念論的な精神性に根拠を求めるのではなく、二重の側面をもつ現象（心的現象としての側面と物的現象としての側面をもつひとつの現象）のその側面が、特殊な仕方で一一致するあり方（生理的衝動にたいする観念の統治）として理解する際に、スピノザを要請していることがわかる。ここに「観念力」

をひとつの思惟の衝動とみるフーイエとの関係を見出しうるが、彼への直接の言及はアルディーゴのなかにはない。

ロンブローゾのスピノザ

ロンブローゾの中心となる著作は、一八七六年刊の『犯罪人間』であり、ここからロンブローゾの実証主義としての犯罪学を立ち上げた。また一八八八年刊の『天才論』において、様々な人種の天才の事例を研究し、天才とてんかんの関係を示そうとしている。

ロンブローゾは、「自由の幻想を批判するためにスピノザを利用する」(Braunstein2007: 346)。しかしロンブローゾのスピノザ理解は、直接の読書によるというよりもむしろ媒介的なものであつて、その多くをイポリット・テーヌに負っているとされる。「テーヌこそがわが師であつた。」(« Enquête sur l' « Œuvre de Taine » » : Braunstein2007: 346)

実際にロンブローゾのスピノザの言及は、主に、ユダヤ人が生んだ天才としてのスピノザという人物像に向けられている。『白人と有色人』のなかでロンブローゾはスピノザを「白人」で自由思想の英雄の一人に数えている。

「わたしたちだけが、ルターとガリレオとともに、エピクロスとスピノザとともに、ルクレティウスとヴォルテールとともに、思想の自由を発明したのだから」(*L'uomo bianco e l'uomo di colore*, 2^e ed., 1892, p. 222 ; Braunstein2007: 348-9)。

この人物の並びからみるに、経験論、唯物論の側から思想の自由が由来しているという思想史の解釈が前提されていることを見て取ることができる。ここにもテーヌの影響を見ることができるともかもしれない。

フェリのスピノザ

フェリは若干二二歳の時に書き、同じ一八七八年に出版した博士論文『帰責の理論と自由意志の否定』のなかで何度かスピノザに言及している。この著作について、師のロンブローゾは「イタリアの科学にとって『真の事件』であり、自由意志が実在しないことを証明し、そのうえその非実在こそが刑法の基礎であることをも証明した」(*Archivio giuridico*, XXI, 1878 ; Braunstein2007: 350)と評している。

しかし、このスピノザの言及は、実のところロンブローゾよりも前の師であつたアルディーゴによるスピノザの言及(初期の著作で複数回スピノザに実際言及している)と、アルフレッド・フーイエの『自由と決定論』の初版からとられたものである。

「自由意志への信念が私たちの意志の結果の認識と意志を支配している法則の無知とに依存していることに注意したことに關してスピノザはまったく正しい。」(*La teoria dell'immutabilità*, 1878, 40 ; Braunstein 2007 : 351)

フェリはまた自身の立場として称する「科学的運命論」をルターに代表される「宗教的運命論」から区別し、「人間の行為の自然的決定論」

は「(宗教的)運命論」から区別されると述べている。

「自由意志の否定が人間を盲目的な運命に従属する自動機械にしてしまふというのは単なる幻想である。」(*La sociologie criminelle*, 341 ;

Braustein2007 : 352)

「私のアイデアを正確にするためには、人間は機械であるのだが、

機械からできているわけではないと述べることになるだろう。」(*La*

sociologie criminelle, 334-335 ; Braustein2007 : 352)

また自由意志の否定が即座に善悪の否定にもつながらないことをスピ

ノザに言及しつつ、論じてもいる。

「もしある事物、ある行為が人間にとって有用であるならば、私た

ちはそれを良いと名付ける。それが害をなすなら、それを悪いと名
付ける。」

ここまでのまとめ

アルデイーゴ、ロンブローゾ、フェリらはすべて一八七〇・一八〇年代
の当時の実証主義と近い関係にあり、その意味で文脈を共有していたと
言えるが、その界限において自由意志を否定することこそが、真の意
味での自由思想を可能にするのだという信念が共有されていたことがわ
かる。そしてその意味での自由思想家の英雄としてスピノザの名が挙げ

られている。これは必ずしもイタリアにおいてのみ見られることではな
い。エスピナスの友人でもあったテオドル・リボー・ヒルツグの著書『意
志の病』(一八八三年刊)においても、「スピノザ曰く、私たちの自由意
志という幻想は、私たちを行為せしめている動機に対する無知でしかな
ら」(T. Ribot, *Les maladies de la volonté*, 1883, p. 146 ; Braustein2007 : 354)
と述べられていることから、フランスにおいても共有されていた文脈
のように思われる。歴史的にみて重要だと思われるのは、これらの議論
の多くが一八七〇年代から一八八〇年代に集中しているという事実であ
る。ウォルムス、デルボス、ブランシュヴィックらの議論は、これらが
背景的な力場を形成しているとみることによって理解することができるよ
うに思われる。

フイエの『自由と決定論』

ただこのようなスピノザ読解が、かなり安直化・教条化されたスピノ
ザ像だということは否定できない。アルデイーゴを除けば、哲学的にテ
キストを読むというよりも、自分の議論の行きがかり上、スピノザに言
及することが一種の流行のようになっていくからそうしている、という
ところもあるだろう。実際、フェリによるフイエに対する言及は、不
正確というわけではないが、フイエ自身の文脈とはずれてもいる。フ
イエ自身は、自らの立場を決定論と自由の折衷の立場に見出しているの
であり、自由意志を否定したときされるスピノザの立場に己を同一化して
いるわけではない。ただ、スピノザの議論が誤解されたまま理解され、
批判されていることを正し、それによって自由と決定論とのあいだに新

たな調停の可能性を確立することが目的であった。以下では、フーイエのスピノザの議論のうち、行為の原因についての無知が必ずしも自由の観念を生み出すわけではない、ということ述べている箇所を引用する。

「以上の考察は、わたしたちをスピノザの問題の前へと連れていく。すなわち、私たちの自由の観念をわたしたちに与えるのは、行為の原因の無知にあるのか、という問題である。このような一般的かつ曖昧な形式のもとでは、スピノザの命題を維持できないことは明白である。自らのインスピレーションの原因について無知である詩人は、それを神に帰するのであって、己の自由に帰することはないとか、精神、照明、熱狂といったものは、己自身よりも優越的である力能によって増大するだとか、しまいには随意の自由の感情は、わたしたちの行為の動機そのものの認識とともに増大するのだというようにそれに対して応えられてきた。しかし、これらの一般的な回答は、スピノザの命題ほど十分に証明されておらず、むしろその結論に基づいているのだ。第一に、任意の行為を生み出す原因についての無知といったものが、自由の観念を産出することができるのではない。意志的で志向的な決定 *determination volontaire et intentionnelle* の原因についての無知がそうするのである。理由をしらずに嘯いているときにも、また理由を知らずに目をしばたいているときにも、理由も知らずに韻を踏んでいるときにも、理由を知らずにあるヴィジョンや照明を得るときにも、わたしは自由を信じているのではない。しかし、このいずれの場合にも、たとえば投票するか、投票することを差し控えるかといったようなくつかの

のあいだの志向的な決定といったものが問題なのではないのだ。〔…〕私の決意の意識的な動機についての無知が、予測を逃れる随意の自由の観念を私に与えることができるのではない。それができるのは、複数の意識された動機のあいだで、私にしかじかの決定された決意をさせる原因についての無知なのである。ところで、この原因は必ずしもそれ自体が意識化された動機であるわけではない。それは私の性格や固有の性質、私の無意識の習性や明かされない傾向性といったものかもしれない。そのことをヴァントは個人的因子 *facteur personnel* と呼んだのだが、つまりは私の心理学的かつ生理学的な成り立ちであって、私の個人的な反応の在り方なのである。」

(Fouillee 1890: 8-9) ^{4 5 6}

4 この著書（一八七二年が初版）では「無意識」という語が頻出し、それが人間の複雑で意志的な行動の真の原因となつてゐる。そしてその無意識は、「心理的化學」とでもいふべき複雑な法則にしたがつており、それが私たちに知られていない原因である。つまり、それがその随意的自由の観念を生じさせるものであり、ここにおいて決定論と自由が両立するという構造になつてゐるように読める。つまり意識化されたものとしての自由、無意識における決定論という構図だ。気になるのは、これがT・リボーやP・ジャンネを介した、あるいはシャルコー自身を介したフロイトへの影響であるが、この辺りは不明。

5 この著書の構想がどこから来ているのか、定かではないが、Taineの『知性』（1870年）は相対的に好意的に参照されている一方で、Cousinおよびクザン学派は否定的に議論されている。またスパヴェンタのようなイタリヤの議論やクーノ・フィッシャーのようなドイツ哲学史家の議論も出ていない。おそらくテーヌからの流れというのがありうるラインだと思われる。

6 ここでは扱わないが、フーイエの義理の息子であるギュイヨーのほうかむ

スパヴェンタのスピノザ

またイタリアにおいてもアルデーゴ以降の実証主義に典型的なスピノザの読み方とは異なるスピノザの読み方を、一八七〇年代よりも一〇年ほどさかのぼって、ベルトランド・スパヴェンタがイタリアにおいてすでに展開していた。スパヴェンタは、ヘーゲルの影響を受けたイタリア観念論の重要な基礎を築いた人物であるが、以上の実証主義の議論のなかでは全くと言ってよいほど言及されていない。

Savorelli(2007)によれば、一八五〇年代のスパヴェンタの著作である『ジヨルダーノ・ブルーノの実践哲学原理』(一八五一年)において、スパヴェンタは近代の萌芽としてのジヨルダーノ・ブルーノをスピノザと概念体系のレベルで一致していると解釈している。たとえば、ブルーノの「熱狂」がスピノザの「神的知的愛」と一致するとか、ブルーノの神とスピノザの実体が同じであるとか、ブルーノの質料と形相が、スピノザの延長属性と思维属性に一致するとかいった具合である。しかしこのような見方は、一八五四年刊のクーン・フィッシャーの『哲学史 Geschichte der neuen Philosophie』を読むことで決定的に改められた。そしてその修正されたスピノザ理解は、一八六一―六二年の講義において示され、そこにおいてスピノザはブルーノに還元できるという従来の見

しろフイエ以上スピノザについてこだわっていたということが、フイエの回顧によって示されている。とはいえ、ギュイヨールのなかで明示的にスピノザの研究があるわけではない。これについてはA.Comte-Sponville, “Jean-Marie Guyau et Spinoza” in *Spinoza au XIXe siècle*を参照。

方を否定した。むしろブルーノはいまだ「超自然的な神」の概念を残しているのにたいして、スピノザの神即自然としての実体は、超自然的な残滓をまったく残しておらず、そのかぎりでは、スピノザの哲学は「新しい自然主義」であると評価している。そして、そのなかで、さらにヘーゲルによる、スピノザの実体の主体化や、ヘーゲルによるスピノザの属性の解釈を批判している。ヘーゲルの言うように実体は不動の同一性ではなく、むしろ実体の本質的特徴は「動的特徴」にこそある。つまりは、「プラトンのアイデアの『純粋な対象性』とは異なる『活動性』＝『動性 active』である」としている。そして、「因果性」こそが「実体の本来的な『概念』であり、もし実体が絶対的に不動であるならば、実体はもはや自己原因ではないだろう」(Savorelli:2007: 326)としている。そして、この批判はヘーゲルの属性にも向けられ、以下のようにSavorelliはまとめている。

「属性は、実体の反省が把握したものとして考えらることはできず、それは能産的自然、所産的自然、因果性としての『実体それ自体』である。属性がなければ、実体は『具体』ではないだろう。もし属性が現実的に実体の本質を表現しないのであれば、実体はもはや自然ではなく、不動者である。実体それ自体を取り除くことなしには、属性を捨象することはできない。かくしてヘーゲルの解釈とエルドマン(Erdmann)の解釈は退けられる。」(Savorelli:2007: 326)

このようなスピノザ解釈は、一八九〇年代のデルボスの解釈を彷彿とさせる。しかし実際にデルボスの『スピノザと道德問題』においてはス

パヴェンタのみならず、イタリア哲学全体にたいして言及がないので、おそらく独立した流れのなかで（おそらくはヘーゲルおよびドイツ観念論のスピノザ解釈に対する批判というところから）、偶然生じた一致であるだろう。ともあれ、このようなスパヴェンタの先進的ともいえるスピノザ理解は、イタリア実証主義のなかではほとんど活かされることはなかったというのが事実のようである。

結

いずれにせよ、以上で見たような一八七〇年代の実証主義の潮流において、人間の自由と意志の関係、あるいはその背後にある無意識と病理との関係において、その正確さの是非はおくにしても、スピノザの議論に触れるというパターンが繰り返されていることを確認することができた。

またスパヴェンタに見るように、そのようなスピノザ理解が一枚岩的に存在したというよりも、やはり複層的な解釈コードが存在していたとみるべきであるだろう。そしてこの事態こそが、スピノザの〈遍在〉を条件づけているように思われる。

参考文献

- Ardisio, Roberto 1882-1918, *Opere filosofiche di Roberto Ardisio*, t.1-t.11.
- Bordoli, Roberto 2007, « Notes sur le positivisme italien et Spinoza », in André Tosel, Pierre-François Moreau et Jean Salem éd., *Spinoza au XIXe siècle*, Publications de la Sorbonne, pp. 331 - 344.
- Bouquet, Paul 1889, *Disciple, édition définitive*, Librairie Plon, Paris. ボール・ブールンヒェ（内藤濯記）『弟子（上・下）』岩波書店、一九四一年。
- Braunstein, Jean-François 2007, « Spinoza « génie jurif » ou criminel ? Spinoza jugé par C. Lombroso. E. Ferri, P. Bouquet », André Tosel, Pierre-François Moreau et Jean Salem éd., *Spinoza au XIXe siècle*, Publications de la Sorbonne, pp. 345-362.
- Espinas, Alfred 1880, *La philosophie expérimentale en Italie : origines, état actuel*, Gerner Baillière, Paris.
- Fouillée, Alfred 1890, *Liberté et le déterminisme*, Félix Alcan, Paris.
- Ferri, Enrico 1893, *La sociologie criminelle*, trad. de l'auteur sur la 3e éd. Italienne, Arthur Rousseau Éditeur.
- Lombroso, Cesare 1889, *L'homme de génie*, Félix Alcan, Paris.
- Lombroso, Cesare 1889, *L'antisémitisme*, V. Giard & E. Brière, Paris.
- Savorelli, Alessandro 2007, « Bertrando Spaventa : Spinoza entre Bruno et Hegel », in André Tosel, Pierre-François Moreau et Jean Salem éd., *Spinoza au XIXe siècle*, Publications de la Sorbonne, pp. 321 - 330.
- ヘルトランド・スパヴェンタ「ヘーゲル論理学の最初のカテゴリー」、スパヴェンタ・クローチエ、ジエンティエーレ（上村忠男編訳）『ヘーゲル弁証法とイタリア哲学』月曜社、二〇一四年、五―一七頁。